

《正岡子規（36）の続き》その310

天涯茫茫

列伝⑯ 佐藤紅緑（本名治六）の余談

これは全くの余談である。前々回に紅緑筆の子規送葬記を載せ、土葬から火葬が、墓地の狭小化にあると述べた。今回はその余談である。

伝染病の死者を火葬にした衛生上の見地から、墓地の狭隘による火葬へと時代がかわったのは当然と云えよう。

ところが、火葬だけでは追いつかなくなってきたのだ。朝日新聞道内版二〇一〇年一月八日附夕刊は、一面に「墓標は樹木 省スペース」の大きな題目を掲げて、都立霊園が遺骨を樹木の根元に埋葬して土地の共有を導入すると報じている。

いよいよ各戸が遺体を火葬して、墓石を建てることを許さない時代となったのである。

東京都によると、都内で現在、1年間に新たに必要とする墓は推計2万基だが、民間霊園を含めた供給数は年約6千基に止まる。20年後には、年3万基が必要になるという。現在でも東京都の墓地の公募での倍率（8ヶ所の平均）は約12倍だから、遺骨を抱えて、墓

を建てるに苦心している人が、いかに多いかが分る。

そこで都は、樹木を墓石のかわりにして、根元に遺骨を埋葬する「樹木葬」を2012年度にも都立霊園に導入し、1本の木を複数の人の墓標にすることにより、省スペース化を図って、墓地不足を解消し、あわせて緑化をも進めるという。既に寺や民間霊園では、90年代末から20ヶ所近くで行われている。都市では横浜市が07年3月から始めている。

海や山に遺灰を撒く「散骨」よりは、合理的かもしれない。それに子孫に、墓地管理の負担をかけない利もある。

ただし、この制度が導入されても、自治体や民間霊園の墓地購入や、墓碑建立費に較べて、割安になることは事実だが、やはり相当額の費用は徴集される。

墓地の新設が、財源や土地の確保のむずかしい現状で、墓地の利用度を上げようとする試みである。

子規の親友の夏目漱石は、大正5年（一九一六）12月9日死去した。年来の胃潰瘍の悪化によるものだった。

遺骸は妻鏡子の意思で病理解剖に附されることになった。なかなか進歩的な女性であった。執刀は東京帝国大学医科大学の病理解剖学教室の長与又郎教授である。

子規の死後16年経っているが、土葬ではな

く、火葬された。葬儀は12月12日、青山斎場で行われた。終つて落合の火葬場へ運ばれ、荼毘に附された。現今の如く、急速火葬の時代でないで、骨揚げは、翌13日であった。土葬なら墓地がきまつていれば、葬儀の同一日に埋葬も行われるが、火葬で骨揚げが翌日では、埋葬も日を改めて行われる。

漱石の陶製の骨壺も、年末に近い12月28日に雑司ヶ谷墓地に埋められた。ひな子という幼い時に急死した五女のため墓地は買ったが墓は建てずじまいになっていた土地に埋められた。新しく八、九尺ほどの穴が掘られ、花崗岩で組み上げられた石の唐櫃に壺は納められ、石の蓋が閉じられた。菅 虎雄筆の九寸角、丈二間の墓標が建てられた。

初め遺骨を葬ったところは旧墓地の中央で、出入りも悪く、そこに墓を建てるとなると場所も狭く、どうしたものかと考えているうちに、都合よく新しく墓地が取りひろげになったので、いち早く今の墓地を買って墓を一周忌前に建てることになった。漱石の戒名と妻の戒名を並べて、同じく菅に書いて貰つて彫りつけてある。

漱石の死後六年を経て亡くなった森 鷗外（大正11年7月9日死）も火葬だと思いが、いま小生の手許には資料がない。